

HSG はしもと接骨院（緑区橋本）は、2008年に開業し15周年を迎えました。患者さんの口コミで遠方から通う人も多い人気の接骨院です。健康保険の使えない実費治療が中心で、新しい治療方法を次々と導入してきました。コロナ禍のなかでは、来院できない患者のために、ワゴンを改造した「移動式治療カー」を開発。自宅まで出掛けて痛みを治し、感謝されました。現在はより大型化した2代目の移動式治療カーを製作し、企業へ出かけて福利厚生の一環として治療する事業が拡大しています。

## ■コロナ禍で一変

はしもと接骨院院長の羽田野龍丈（はだの・りゅうじょう）さんの実家は、大分県の山寺だったそうです。祖父から継いだ山寺は周辺の寺院と統合され、羽田野さんは23歳で接骨院での修行を始めました。

患者が1日に200人来たという人気の接骨院で8年間修行したのち、31歳ではしもと接骨院を開業します。「師匠を見て年収5000万円欲しいなと思ってスタートしましたが、お金だけ追いかけてと殺伐とします。施術の技術で人を助きたい、というのもどこか坊さんの世界かもしれません」と、羽田野さんは笑います。

接骨院は捻挫や脱臼などの怪我や、ぎっくり腰、寝違ひなど痛みを抱えた人に対して、手技療法や電気療法を使って痛みをとるための治療をします。はしもと接骨院の患者は子どもから高齢者まで幅広く、プロ野球選手や大相撲の関取も通うようになりました。

健康保険が使える一般的な治療ではな

く、電気治療機器を独自に応用した「ハイボルト」、高周波でインナーマッスルを鍛える「Eトレ」など、独自の新しい施術を増やしていきました。電気治療の実績から、各地で講演を頼まれるほどになっていきます。

しかし、順調な接骨院経営は、人の問題でつまずきました。若い人材を育てようと院内で勉強会を開いていましたが、「残業代がつかないのはおかしい」と反発されてしまったのです。続いてコロナ禍で人と接触する接骨院の仕事は難しい運営を迫られ、撤退するにもお金がかかる厳しい状況に。講演会やセミナーの収入でなんとか乗り切りました。

## ■事業再構築補助金も活用

そんなコロナ禍のなかでの立ち直りに力を発揮したのが「移動式治療カー」です。ワゴン車に治療に必要な機材やベッドを積み込み、お客さんのものに出かけていく。ぎっくり腰で動けない人の家へ出かけていき、その場で動けるようにしてあげました。

現在は、より大型のトラックの荷台に



## 出張型の接骨院で企業の福利厚生に貢献

治療室を作った2台目を、事業再構築補助金も活用して機材を購入し、製作しました。力を入れているのは企業の健康経営の支援で、福利厚生の一環として会社への往診を行なっています。

羽田野さんは「ガテン系の身体を使う仕事では、痛みを我慢して身体を壊すと退職につながってしまいます。痛みを我慢している人はいませんか？と呼びかけます」との活動は評判を呼び、まず相模原を中心として企

（株）HSG代表取締役  
はしもと接骨院 院長 **羽田野 龍丈さん**

業の利用が広がっています。費用の半分を会社が負担する仕組みなどで、企業の福利厚生を担う新しいタイプの接骨院となりました。

## ■「休養学」の普及も

さらに現在は、メディアで注目される「休養学」を提唱する片野秀樹博士（日本リカバリー協会代表理事）と交流し、痛みに関係する自律神経の療法としての「休み方」を研究しています。寝ることだけが休養ではなく、運動や娯楽も大事とか。「片野先生の学問としての休養学を、私は実技として広めたい」と話す院長は、他のスタッフにも休養インストラクターの資格を取得させています。